



レシピ#010

R5.3月

一人の人間として、子どもと共に学ぶ教師の姿



〔伊達地区〕低学年 道徳科の授業より
主題名 相手のことを考えて
内容項目 〔親切、思いやり〕



授業のワンシーン



小学校において、道徳科が全面実施されてから6年目を迎えようとしています。教科化されてから、終末に「教師の説話（体験談）」をする授業が少なくなっていますが、教師が実体験を語る教室の雰囲気には、いつも特別なものを感じます。「道徳科では説話をしない」—そんなことはないのです。

授業者が、「子どもの時の話をします。」と言葉を放つと、すべての子どもたちの目が、授業者に集まりました。そして、「親切、思いやり」に係る小学校時代の実体験が語り出されました。「終業式の日



〈教師の説話を聴く姿〉

の帰り道に、自分より下学年の子が、荷物がいっぱい困っていました。でも、友達と遊ぶ約束をしていたため、気にはなったけれど、通り過ぎました。歩きながら、自分のことを優先させてしまったことを後悔する思いが重くのしかかります。しばらく考えた末に思い直して戻り、荷物を持ち、一緒に歩きました。」この瞬間、一人の子どもがガッツポーズをして喜びました。周りの子どもたちも嬉しそうでした。



ここがオススメ！



教師の説話に子どもがガッツポーズをしたのは、どうしてでしょうか。

- 「思いやり」の価値が実現したから
- 教師と自分を重ね合わせながら教師の体験した世界に浸っていたから
-

もっと他にも考えられそうです。では、その理由に共通して見えるのはどんなことでしょうか。それは、子どもと教師が「信頼し合う関係」になっているということです。話合いの時には、子どもの目線の高さに合わせて話を聞きます。不安そうな子どもを見付けば、その傍らにそっと寄り添い見守ります。必要があれば、声を掛けます。このような積み重ねによって、揺るぎのない関係性が構築されてきたのでしょう。子ども一人一人を尊重するその教師の姿からは、「一人の人間として共に成長していきたい」という強い思いが感じられました。



〈子どもに寄り添う姿〉

